

■本年度・後期の会員著書一覧

(令和4年6月～10月、定価は税別)

青葉權先 〈歌集〉 令4・9刊

田中幸子 柘書房・2300円

月夜野 〈歌集〉 令4・9刊

尾崎潤子 柘書房・2300円

春の質量 〈歌集〉 令4・10刊

河合育子 短歌研究社・2300円

こころ花めく 〈歌集〉 令4・10刊

浅田みどり 柘書房・2300円

ネパールの礫 〈歌集〉 令4・10刊

秀島美代 柘書房・2300円

聴雨 〈歌集〉 令4・6刊

鈴木竹志 六花書林・2500円

白い消しゴム 〈歌集〉 令4・6刊

志賀日出子 柘書房・2300円

象の眼 〈歌集〉 令4・7刊

奥村晃作 六花書林・2500円

火の記憶 〈歌集〉 令4・7刊

大西淳子 青磁社・2300円

【注】批評特集に取り上げるのはコスモス叢書だけです。

叢書の登録方法については、本年「コスモス」三月号の表Ⅲ(179頁)をご覧ください。

縁を大切にする人

早川 晃 央

『八十一の春』に続く、五年ぶりの歌集であり、二〇一九年から二〇二二年までの五九八首からなる第十八歌集である。歌集名となっている『象の眼』は次の歌からとられている。

〈象の眼〉と妻が言いたり 〈象の眼〉は疲
れ切つたる時のわれの眼

私が奥村さんと最後に会ったのはもう十年近く前。学生時代、毎月の読書会や歌会で本当にかくさんのことを教えていただいた。その場には奥村さんの妻である佐藤慶子さんもいて、学生の私をいろいろ気遣ってくださった。当時からそうだったが、この歌からお二人の互いを信頼し、尊敬し合っており、仲睦まじい様子が想起される。

この歌集を読んでいると、これまでの奥村短歌ではあまり感じたことのなかった違和感があった。それは、字余りの歌が多いことだ。どの歌もリズムは心地よく、音としての違和感はないものの数の多さに驚いた。

かと言って百パーセント定型の歌集があら
ばそれは駄目だろう

「かと言って」とは「定型を守るべし」というメッセージ

だろう。私も「定型遵守」を何度も教えられていたからこそ気になったのかもしれない。数えてみると年代によるばらつきなく、歌集全体の三分の二にあたる五九八首中四〇〇首が字余りの歌だった。なぜこうなるかを考えた時に固有名詞の歌の多さに気づく。固有名詞を用いた字余りの歌を三首引く。

九年前マイケル・ジャクソンにのめり込み

高熱を発し入院せりき

「大江戸線」地下深く行く地下鉄で運転手

あまたコロナ陽性と

宮柵二・英子師魚沼の空に降り聴き賜いし

やわが講演を

やはり口ずさむと字余りの歌であるのにどの歌も共通して、字余りを感じさせることはなく、リズムが整えられている。そして、それぞれの歌に「らしさ」が感じられる。特に二首目。運転手だって、仕事が終われば地上に出て普通の生活をしているだろうと考えるところを詠む発想の面白さがある。また、「地下深く行く地下鉄」のリフレインや結句の「と」はなかなか真似できない。

奥村さんは人との「縁」を語ることが多い。コロナ禍で、対面が難しいなか、奥村さんの食欲な姿勢が伺える。

機械音痴のわれなるゆえに四苦八苦してます Zoom 習得すべく

飯田・伊那・名古屋・板橋・八王子・杉並・松戸 Zoom 歌会ナウ

コロナ禍があるいは良かったかもしれぬ

「岡井隆をしのぶ会」見る

コロナ禍でも歌会ができた喜びだけでなく、その変化を詠んだ時事・記録詠としても価値がありそうだ。また、あとがきには「たまたま、新型コロナウイルスのパンデミックの始まりから今日に至るまでの、我が暮らしの中の詠嘆であり、おのずからコロナ禍歌集となった。」とある。

帰宅してマスクは捨てて手を洗うゴシゴシ

洗う石鹸を付け

全身がコロナウイルスまみれなるわれ玄関

でコート、ズボン脱ぐ

千円を入れると釣りがレシートが出て支払

は機器が受け持つ

マスクして鼻出す鼻のどの鼻もミニクイ鼻

は出さぬが宜し

一首目は二〇二〇年前半、二首目は二〇二一年前半の章から引いた。どちらも独特の言い回しだが、東京在住の高齢者の生活における警戒レベルが一年で変化して行った様子が見てとれる。三首目は、コロナ禍で進む技術革新に詠嘆し、四

首目はマスク生活を奥村さんらしい視点で前に挙げた歌同様リフレインが効いている。ただごと歌に代表される独自の視点はもちろんだが、断定口調の表現やカタカナの使い方もまた奥村短歌の魅力の一つと言える。

他に、この歌集に様々な故人を偲ぶ歌がある。その中でも岡井隆を追悼する歌は数が多く、際立っている。

〈前衛の歌人〉貫き逝きにける岡井隆の孤心を想う

評論の会に招かれ通いしが岡井氏とお喋りする事なかりき

人間が、歌が、生きざまが面白いというたびと

岡井は死んでしまった

常に先頭を常に先端を走つてた前衛歌人岡

井隆は

話したことはなくても歌の中にあるように前衛の歌人というスタンスを貫くところや「孤心」といった表現に「ただごと歌」を貫いてきた奥村さんが共感し、リスペクトする存在だったのではないかと読める。

技巧的表し方が好きでない真っすぐに詠む

オクムラ短歌

老歌人オクムラは歌に忙しく今日また風呂

に浸かるヒマは無く

老歌人と言いながらも新たなものを積極的に取り入れ、今もってなお進み続ける奥村さんに憧れを抱くばかりである。

今から次の歌集が楽しみでならない。

人の名・人

竹内夏実

鈴木竹志氏の第三歌集『聴雨』（二〇一三年以降の作品群）を読みました。歌集のなかに出てくる森銑三について調べてみたら読みたくなりました。今、読んでいるのは『おらんだ正月』です。森銑三は、鈴木氏と同郷の刈谷の人です。

大切な一冊として書庫にあり森銑三著『松本奎堂』

松本奎堂も刈谷の人です。森銑三に関する歌は、鈴木氏の第一歌集『流覽』のなかにも何首かあります。

『雨月』にぞ森銑三は詠まれたり森銑三は刈谷人なり

『雨月』を開くと、高野公彦氏の森銑三に関する歌がありました。高野氏は出版社勤務をされていた折、森銑三と面識があり、歌にも詠んでいます。

本すこし風呂敷に下げ長身の森銑三氏本郷を行く

森銑三をめぐるつては鈴木竹志著『高野公彦の歌世界』に詳しく記されています。『おらんだ正月』に関する記述もあります。

森銑三に限らず、『聴雨』には固有名詞が入っている歌がたくさんあります。

読みなれし二宮冬鳥の雨の歌いづれも聴雨の歌と今に悟れり
洋行の不折を思ふ子規の文『墨汁一滴』にかつて読みたり

「ねじ式」のあの機関車の在りかなど教へてくれたり川本三郎

『赤光』の茂吉の歌を思ひをり我が母の命終いよよ近きに
理不尽と心底おもふ評論の先達たりし小高氏の死は

ほかにも佐伯一麦、庄野潤三、佐藤通雅、『路上』、ゾシマ長老、『群黎』、『忘路集』、『流木』、『落葉樹林』、『あぶさん』、藤原マキなど皆、歌のなかに溶け込んでいます。

歌集『聴雨』のカバーを眺めていると激しく垂直に降る雨の様子が伝わってきます。そして、雨の音が、歌集のさまざまな箇所で響いています。歌集には多くの挽歌が詠われています。肉親から親しい友人知人、さらには教え子の死に到るまで、歌うことで、作者がまた歩き出すということが、伝わってきます。

歌会の席にやむなく伝へむとして涙にじみ
来柏崎さんの死を

『北窓集』読みさして聴く雨の声あわてな
くてもいいんだこの世は

そしてさらに数年ののちの歌。

「今宵温き雨を聴くかな」『四月の鷺』読
みつつ見つくる言の葉嬉し

日々の生活の中から、次のような歌も歌われています。

露草の青のみ映ゆる朝の道老いたる犬を引
き連れ歩む

葦の花星の如くに咲きてゐる細道を行き秋
に真向かふ

『聴雨』のカバーをはずすと、葦の花のような星々が本の
表紙の上の方に出ていました。

至福とはいくらなんでも大袈裟とおもへど
今日のどら焼きうまし
夕暮れの田植糸終へたる水田は鏡となりて
夜空を迎ふ
快速に二度抜かれゆく鈍行の「鈍」が好き
なり鈍重でよし
ミッドランドスクエア四十六階スカイプロ
ムナード夜景美^はし

たまたま今読み続けているマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』には、固有名詞がたくさん出てきて、またその固有名詞には強い詩的喚起力があります。（「スワン家の方へ」第三部「土地の名・名」など）。たとえば、バルベック、ルグランタン、フィレンツェ、ヴェネチア、ジョットなどです。固有名詞が教養、知識、装飾にとどまるか詩的な力を持つかは難しいところです。ブルーストの作品では固有名詞が作品の中で生きていて、動きだすようです。

そしてそれは歌集『聴雨』に出てくる固有名詞を使った歌にも言えると思います。

歌の水源としてのさびしさ

田宮朋子

『さみしい檸檬』につづく第三歌集で、二〇一五年から二〇二二年までの作品四八八首を収める。年齢にすると四十二歳から五十歳直前までの作品である。二十代から短歌を作ってきた大西さんが、以前に増して短歌の研鑽を積んだ時期であり、本歌集にはこの間に得た〇先生賞、コスモス賞の受賞作品が含まれている。本歌集は、夫君の転勤により福岡県から千葉県に転居したところから始まる。

腹を割り話がしたく背開きの鰻を食べて郷に從う

蒼天を肩で支えるアトラスを思いつつわが靴をかつぐ

転居するたびに新たな職を得てピサの斜塔のごとき安定

大西さんは移り住んだ首都圏で、新たな仕事を探すことになる。鰻の裂き方は、関西では腹開き、関東では背開きが主流である。一首目はそのことを踏まえた歌で、「腹を割り」と「背開き」が出てくる点がおもしろく、新たな土地に積極的になじもうとする精神の柔軟性が出ている。二首目の

「靴」は仕事の靴である。「アトラス」はギリシア神話に出てくる天を支える巨人。飛躍の大きさに瞠目させられるが、仕事への並々ならぬ気概を示している。三首目、転居するたびに新たな職に就き、安定した生き方をしていると自認しながらも、「ピサの斜塔」を出したところに一抹の不安が表れている。「あとがき」に「私の歌は、世の不条理や違和感のなから多く生まれています」とあるが、「ピサの斜塔のごとき安定」という比喩はそうした心理を表していて絶妙である。

さびしさに点る螢は胸に住み今宵は青くま
たたきやま
ズ
独りぼつちと選んだ孤独とは似て非なり雑

踏のなかひとつ椅子あり
わが胸の奥処にいつも風ぐ海のありてひと

ひのカオスを鎮む

「さびしさ」は大西作品のキーワードの一つである。流産したあと子どもに恵まれないことからくるのかもしれないが、大西さんのさびしさは深化を上げていて、時に昇華され青い螢となって作品の中にまたたく。二首目、「独りぼつち」と

「選んだ孤独」^{ソリテユート}を識別する眼が知的かつ思索的である。大西さんは家庭人として職業人として歌詠みとして、「独りぼっち」ではなく「選んだ孤独」を生きているのである。この「選んだ孤独」は、宮柾二の「孤独派宣言」の「孤独」に通じる。大西さんの胸中のさびしさは、それこそが短歌作品を生む豊かな水源とっていいのではないか。三首目は、一、二首目と同じ一連の中にある。胸の奥にある「風ぐ海」が、個として自らを律するところからくるさびしさを鎮めるのだろう。この海は瀬戸内海に面したふるさとなつながら。

どこにでもあるけどここにしかなくて 讃岐
うどん は 讃岐で 食べる

秋の夜のそら冴えわたり 目に見える月より
遠し 見えぬ ふるさと

涼やかに そうめん 入るる みずいろの ガラス
食器は 火の 記憶 持つ

大西さんのふるさとは讃岐うどんで有名な香川県である。

讃岐うどんと銘打ったうどんは全国どこにもあるが、本物は讃岐にしかない。二首目、「見えぬふるさと」という言葉の背後には「見たい」という願いがあふれている。父母や兄を詠んだ歌、幼い頃のことを方言で詠んだ一連もある。三首目、そうめんも香川県の特産品である。「涼」と「火」のギャップが一首に奥行をもたらしているが、涼やかな大西さんの微笑を知る者としては、「火の記憶」には自らの源流への篤い思いも託されているのではないかと推察する。歌集題はこの歌に拠る。ふるさとへの思いは懐旧の念に留まるものではなく、

未来に向けての活力になっていくようだ。

ちゅうねんの深き眠りの細胞を覚まさん F

P 試験に挑む

男より速く歩けぬ構造の例えば パンプス、

タイトスカート

飛べるとは思わないけど 飛べるなら今かも

しれず傘をひろげる

「FP試験」は、ファイナンシャル・プランニング技能検定。中年になってから新たな試験に挑むところが意欲的である。二首目、働く女性として男女格差を感じることもあるのだろう。靴や衣服の構造にそれにつながるものを見る目が鋭い。三首目、状況を見定めつつ、未来を切り開こうとする意志が感じられる。むろんここには、仕事のみならず、短歌への思いも託されている。

疾駆する風のたてがみ 街上に 金貨、銅貨を

こぼして 去りぬ

V の字の翼をもてば 梅雨晴れに 羽ばたく 白

き洗濯ばさみ

一首目の「金貨、銅貨」は落葉の、二首目の「翼」は洗濯ばさみの比喩である。いずれも身近なものを素材としながら詩性を感じさせる。飛躍した発想、卓抜な比喩、緊密な言葉の回転は、こうした地の作品にも見ることができよう。触れることはできなかったが、茶目っ気のある歌やほのかな色香のにじみ出た歌もあり、内容は多彩である。読みこたえのある『火の記憶』を、ぜひ手に取って味わってほしい。

歌で綴る人生の旅

宮崎 小夜子

『月夜野』は、尾崎潤子さんの第二歌集である。二〇一二年より二〇二二年前半までの歌を狩野一男氏の選により四七八首を収録する。

表題の〈月夜野〉は、平安時代、仲秋の夜に源順が、東国巡行の際にこの地を通り三峰山に昇る月を見て、「よき月よのう」と感銘したのが地名の由来であると、伝説として残っている。町村合併により、月夜野の地名は一部を残すのみで、みなかみ町になった。

みなかみへは、若山牧水が大正十一年に訪れており、約三週間の旅の紀行文『みなかみ紀行』はつとに有名である。牧水が妻・喜志子に宛てた手紙に「闇と山とで西も東も解らぬが、何かしら山の山の奥といふ気持が身体を包んでゐる」と書いた。昔も今も、情感のある山間の町として、個性を光らせている。

本集は、父君の歌がかなりあり、家族等の歌も抒情を細やかに詠みあげ、しかも簡潔な表現で場面を描写している。

三度目の大病を越え細りたる父なれどとき
にジョークは飛ばす

ぼつかりと空きたる車庫のがらんどう父の
こころの洞とも思ふ

父の居る世界わからずわからねど目の前の
父に靴下履かす

一本のチョークさいごに納めたり教員なり
し父のひつぎに

一首目、大病の後日増しに痩せていく父を案じながら、温かい心で寄り添う作者。余裕の視点がユーモアを醸しつつ、現実のきびしさを背後に見せている。二首目、運転を諦め、車を手放さざるを得ない父の寂しさ、老いていくことの辛さ等々、感慨深く詠みあげている。心の整理のつかない複雑な思いでいる作者である。三首目、老いて少しずつ脳はこわれていく。心象から具体へと比重を移動してゆく方法をとりのつぎきならない状態を提示している。「わからずわからねど」という繰返しが、傷みをもって迫ってくる。四首目、父の生命体への賛歌であろう。教員にとってチョークの存在は欠かせない。静かで透明な時の流れが哀しみを誘う。

内面意識の表白によって、深い思索力、またこころを鑑う

ことなく、ことばを丁寧につぐところが説得力のある歌を生むのかも知れない。

付く泥を洗へば色は鮮やかに「にんじんです」と言ひあるごとし

祖母の焼くみそやきもちを食べたつけ囲炉裏つばたに寄り集まりて

田水張る季節となりぬ新しく大地に降りて
ゐる青いそら

一首目、にんじんの存在を大袈裟にあげつらうことなく、そのものの価値を見出そうとする姿勢に感服。素材に対する感性、直感を素直に表現することで、人参の朱色が極立つ骨ぶとの歌いぶりである。二首目、上州弁での日常会話のよくな一首が目を引いた。みそ焼きもち、囲炉裏により山間の冬を思わせ、民話的で情趣の深い面白味がある。三首目、田植え前に張った水が光り、青空を呑み込んでいる。不可分なる天地の深き趣きを、空が降りたとシュールに言った人はまらずに思う。豊かな認識が美しい場面を捉えた作品だ。

第一歌集『七月の蜻蛉』では、仕事人間のため、心も身体もダウンしてしまった夫の歌が多く詠まれていた。だが

空き瓶をなかなか捨てぬ夫なりカンバリ、
カシス、ドライジンの瓶

「白菜が今年も巻かない」と夫言ふいたく
かなしい報せのやうに

提出歌の背後からかなり元気になったことが推察できる。一首目、瓶がお洒落であることと、元気になったことの勲章

として、捨てられないのであろう。ロマンチストなのである。二首目、家庭菜園であろう。野菜づくりは自然との戦いである。白菜は巻くものと信じて疑わない夫の落胆振りが痛々しい。

ふかぶかともどりごねむる夏の夜をエリック・カールの月わたりゆく

をさなごが「もも」といふときすばめたる
口はちひさな言葉のつぼみ

一首目、エリック・カールはアメリカの絵本作家。眠るみどりごは地、月は天であり対比させながら本質を見据えようとする作者。みどりごのもち得る命、そして澄明な月のかげやきがひとつになり、とある夜の物語を語っていると私には思える。二首目、中国では桃は命の象徴と言われている。作者の言うように小さな言葉のつぼみであり、命のつぼみであると言えぬ。魅力的な歌である。

群馬県利根郡月夜野町は二〇〇五年、合併されてみなかみ町になった。

旧町名（月夜野）は父の壮年のころの勤務
地月美しき里

あとがきに「教員だった父は、当時の月夜野町立桃野小学校に二度、計十三年間勤務しました。」とある。本集は父君への思いが沢山詠まれていたが、ごく一部しか引けなかった作者も十年前は闘病生活をしていたが、今では登山を楽しんでいる。本集を読み作者とともに人生の旅が出来た。かすかな空気の動きを感じし、自身の心を鋭敏に感受し、暖か味のある歌集であった。

広い庭を歩く

船岡みさ

『春の質量』は河合育子さんの第一歌集。二〇一一年にコスモス短歌会に入会し、桐の花賞、O先生賞を受賞、COC OONの会のメンバーとしても活躍中の作者である。

目次を見てまず気付くのは連のタイトルに植物、生物の名前を含むものが多いことだ。

ほそく降るあしたの雨へあぢさゐは青すみ
とほる窓を開けたり

たぬきまめ、いたちささげと花ひらく夏の
野原はむんと毛深し

球根の丸きかがやき抱きたる地のゆたかな
る腹式呼吸

一首目、雨の朝に咲いたあじさいは「青すみとほる窓」を開けたのだという美しい表現に引き込まれる。二首目、植物名の中のためきといたちから「毛深し」と連想したのでろう。茫茫と茂る夏の野原がユニークに描かれている。三首目は球根という命を芽吹かせるために、大地は深く呼吸をしているという。それが「ゆたかなる腹式呼吸」であることをごく自然に納得されられる。

草花や樹々は先の三首のようにそれ自体を詠まれているわけではない。作者は非常に繊細な身体感覚を持ち、時に植物と同化していく。

吾亦紅じいんじいんと紅くなる口内炎の熱
こもる午後
陽のそそぐ窓の席にて電卓を打つ指さきは

そよげる青葉

一首目は、吾亦紅と口内炎が「じいんじいん」で共鳴して、痛みと発熱を訴えてくる。二首目は職場の歌であろう。窓のそばの作者には外の樹々が見えており、なめらかに電卓を叩く指はいつしか青葉と同化してそよいでいる。

歌集の中に詠まれた植物を集めたら、樹々が揺れ様々な花が咲く広大な庭園になりそうだ。いや、この歌集が大きな庭なのかもしれない。その庭にはもちろん虫達や動物もたくさんいる。

蔓草がはてなく繁る夏野ゆくひかりするり
と蛇へ戻りぬ

自慢なる尻尾の縞をきゆつと締めとかげ一

匹あさやけあふぐ

天上の春の質量いかほどかひかり引つ張り

ひきがへる跳ぶ

「いのちの今、今を共有することのよろこび。」が自分のめざす大きなテーマだとあとがきにあるように、作者の歌は地球にある全ての命に心を寄せ、慈しむ思いに満ちている。

苦手な人の多い爬虫類や両生類に対してもその思いは変わらない。一首目の蛇も二首目のとかげも生き生きと描かれ、やさしく見守る作者の眼を感じさせる。三首目、歌集名はこの歌からとられている。「天上の春の質量」を考える美しい問いと、冬眠から覚めて春の大地を跳ぶひきがえる、共に始まったばかりの春の喜びを表している。

新しき紙のすずしきにはひせり年度始めの

帳簿ひらけば

曇り日の複写機ひらき詰まりたる雲のひと

ひらつまみ出したり

作者は事務の仕事をしているようで、文房具や同僚、異動などの歌がある中から二首あげてみる。一首目は年度始めの新鮮な気分を詠んでおり、まっさらな帳簿の「すずしきにはひ」に清らかさとこれからの期待を感じる。二首目はコピー機の紙詰まりを直しているのだが、機械を開けて取り出したのは「雲のひとひら」。職場詠と呼ぶには詩的すぎるかもしれないが、これこそ作者らしい職場詠である、と言いたい。

きみおもひ帰る風の夜わがうちの牝鹿のま

なこくろくろうるむ

はじめての街をいつしかなつかしき街へ変

へつつあなたと歩く

すもも食み李のなかのきんいろの驟雨降る

道走りぬけたり

わが父の大きくしやみのひびく朝しろきさ

ざんくわ残らずひらく

自販機へ銀貨すずしく落とす友とほぞらの

星ちりんと増やす

一首目、二首目は数少ない相聞歌。その人を想って眼をうるませる牝鹿がいじらしい一首目、一緒に歩くことで知らない街が特別な街になる二首目共に、恋というよりも静かに相手を慕う気持ち伝わってくる。三首目はすももの中にあるれる果汁を「きんいろの驟雨」と表現し、すももを食べるのはその驟雨の中を走り抜けることであるという瑞々しい歌。四首目は、父上の大きなくしゃみに驚いてさざんかが一度にひらいたかのようなユーモラスな歌。父上への愛情も感じられる。五首目、自販機で飲み物を買う友の行為が童話の一場面のようなのだ。何の変哲もない自販機が遠くの星空とつながっているとは。世界の秘密をひとつ知った気分だ。

雲、鹿、さざんか、星。職場を詠んでも日常を詠んでも、作者の歌には自然が寄り添っている。疲れた時、つらい時、自然の中に身を置くと心が安らぐものだ。この歌集をひらけば、広い広い庭を歩いて木や花に触れ、虫や鳥や動物達と「今を共有」できる。やさしく、詩に満ちた庭を多くの人にのぞいてみて欲しい。

旭川の風土、透明な歌

清水 芳 洞

歌集『白い消しゴム』は、志賀日出子さんの第一歌集で、平成十五年から令和四年までの作品の中から四〇〇首を収める。選歌は影山一男氏。作者は夫君と共に、旭川の冷厳で豊潤な自然と向き合いながら暮らし、夫婦相和して広やかな庭や畑で多種の花、野菜、果物を栽培、北海道ならではの豊かで見事な生き方をしている。

歌集の特色は、日常の中からひと日ひと日を大切にし、まるで童女のような純粹無垢な気づきや、感動を明るく、素早く童体をもって歌を紡ぎ出すところにある。

誰よりも私のミスを知つてゐる豆つぶほどの
の白い消しゴム

歌集名はこの歌から生る。作者は会社の事務員として三十三年間勤務、お気に入り消しゴムは豆つぶ程となり、退職時には宝物として持ち帰り、今でも机の中にあるそうだ。同僚や上司から信頼され、その誠実で思慮深い仕事ぶり、優しい心根が伝わってくる。

雪の中の漬物樽が顔出してここから始まる
北国の春

金色に稲の穂稔る豊作を喜びながら明日の
米とぐ

旭岳は冬空高く顔出して遊んで行けとふ
「カムイミントラ」

高台のホテル丸ごと飲み込みし濃霧はやが
てわが家をつつむ

妖精の遊ぶ庭かと思ふほど「青い池」の面
に木の葉舞ひ散る

北海道の自然を愛し、思ふひとつらの歌を挙げた。一首目、北海道の春は遅い。「顔出して」が、待ちに待った実感を表出。さて、今年の出来はどうかな、思いは巡る。この一年への期待、胸が躍るようすが伝わる。二首目、作者は道産米の出来不出来に、深い関心を寄せる。天候不順を案じていたが、今年は黄金の穂が稔る豊作だ。とぐ米は「ほしのゆめ」？とぐ手が優しい。三首目、旭岳は大雪山連峰の主峰で二二九一メートル。カムイミントラは、アイヌ語で「神々の遊ぶ庭」の意。ヒグマは神の化身である。山に魅せられ山の慰めに生き、高山植物や紅葉、姿見の池などに寄せる思いが、

「遊んで行け」に集約されている。四首目、「丸ごと飲み込む」が作者の感官をよく表わしている。たちこめる乳白色の不気味な霧が全体を包みこみ、移霧はやがて家が隠す。静寂の中に、霧の神秘的な色感、明暗の調子さえも窺える。五首目、美瑛町の人気スポットである。「妖精の遊ぶ庭」とは、幻想的なコバルトブルーの美しさに感動し、動けないことから発したインスピレーションなのだ。次に、旭川歌壇にかかわる歌を少しく見る。

キタキツネ不意に現れ招くがに柎二の歌碑
の広場横切る

お似合ひの赤いレーザーに棒ネクタイ松
田氏を偲ぶ通夜の夜は雨

一首目の歌碑は、「大雪山の老いたる狐毛の白く変りてひとり径を行くとふ」が刻まれている。この歌碑は松田一夫氏が建立（柎二の道内最初のもの）、寄贈した。作者は何かにつけて歌碑を訪ねる。二首目、松田氏は柎二に師事し、石狩川源流行（昭和二十七年）に同行した。柎二の歌は「あかだもの林の中をくだりつつ石狩川の白き源流」（旭川小集）である。同行者に、酒井広治（白秋に師事、「旭川歌話会」創設）、小林孝虎（「北方短歌」を主宰、作者は十年間指導を受けた）がいた。赤いレーザー、棒ネクタイは氏の象徴、通夜の雨が心をゆさぶる。氏は旭川の短歌結社の交流を図り、「旭川歌人クラブ」を創設、「旭川文化奨励賞」を受賞した。コスモスの功労者であった。

次に、清く心どに沁む歌を。

ひと束の木綿の糸を傘寿なる夫が栲くり吾
が糸巻く

碁を打ちに季節の花を下げて来る花をぢさ
んと名づけし人が

一首目、民話絵本の一場面を想起、夫婦の至福の時の流れに思いを馳せた。夫君に寄せる歌は多く、印象深い。夫君は長年教職にあつて、功績大により受章した。二首目、夫君と花おじさんは、碁のよきライバル。作者は床の間に、白い紫陽花などを飾って応待、何度かお茶を出す、両者は手に取らない。作者は、死ぬか生きるかの激闘を悠然と見守っているのだ。花おじさん、言い得て妙だ。

白亜紀の歴史を偲び耳寄せてアンモナイト
の潮騒をきく

三億五千万年前の悠久の昔へ、歴史を見る眼が少女おとめのよう
で、詩的な嫺やかさをもつ。

夫がゐて子がゐて花が並び咲く家があつて
も淋しいピエロ

しめやかで、激情のある歌。ピエロは自分を貶しめる笑いおこ（鳥訥の笑い）をもつ。笑いは武器、やがて悪霊を討つのだ。作者は一步も引かぬ意志の激しさを、童女の匂ひやかさに包んで、歌と正対する。

沢山の雪が降らうと寒かるとこの北海道を
愛して生きる

この覚悟がこれからも作者の歌を命あるものにしてゆくの
だろう。

菜の花盛り

中村仁彦

二〇〇七年に七三歳で「コスモス」に入会した秀島さんは今年八九歳。コロナ禍の時も感染状況が少しでも改善すると佐賀から福岡のカルチャーに通ってこられる。ともかく前向きでユーモアがあり元気な方だ。第一歌集『ネパールの礫』の四百十七首にその元気があふれている。

古稀過ぎて優先順位は古家のリフォームよりも海外ツアー

観覧車あつげらかんと回りゐるアントワネットの処刑の広場

ひたむきに詩をつくりゐるみすゞの背^た顕^ちくる生家の小^ちさき文机

遠く来て初の墓参が叶ひたりコスモス美^はしき師の奥^つ城に

まだ叶ふこと叶へむと新緑の古都巡りツアーにひとり参加す

六十六歳で私立高校の英語教師を退いた後、国内はもとより世界各地に出かける。二首目はフランス旅行の時の歌。フランス革命で獲得した自由を象徴するような観覧車の「あつ

げらかん」が現代社会を風刺する。国内旅行も歴史だけでなく詩歌への思いがあふれる。三首目、四首目のように金子みすゞを想い、宮柊二を思うのだ。そして五首目、夫を亡くし一人になってもセミ一人旅が続く。

食はず嫌ひしてゐし一つ老いて聴くエルビスプレスリー低音がいい

桜^{さくら}花背^{はなせ}に唱歌たからかに斉唱す後期高齢者と呼ばれたくなし

終活のひとつと遺影撮り終へておいしくいただく友とのランチ

もう読まぬ『老いの才覚』『老人力』『老いない技術』机上にあれど

「萎」の字には女のありてなゆるなと今宵もクリームたつぷりと塗る

前向きさは旅だけではない。日常生活にも顕著だ。退職後コーラスのグループに入って活動していて、いろいろな場面で歌を口ずさむ様子が詠まれる。一首目、老いてロックを聴き始める。「低音がいい」の具体が効いている。二首目、「後

期高齢者と呼ばれたくなし」にストレートだが強い意志が出ている。三首目、終活でさえとても明るい。四首目、老いに関する本を読み漁っても参考にならず自分流の老い方をするという宣言。最後は、「萎」の字をうまく使って、顔の張りを保つ日々の努力を詠む。常に外に出かけんとする人しか詠めない歌だ。

苦しんでゐるのに笑つてごめんさい尿瓶

の名前がコ・ボレーヌなの

正午には鳴るアラームを止めないでおきま

す亡夫が昼餉に来ぬかと

亡き夫の教へ子十六人集ふ墓処はかどをほそき時

雨が濡らす

夫逝きて重き意味持つ比喩と知る空、気、の、や

う、な、存、在、といふは

変哲もなけど蔵へるネパールの山より夫が

拾ひ来し礫いし

作者がコスモスに入つて三年後、共に教師だった夫が亡くなる。その後たびたび詠まれる夫恋の歌によつて悲しみの深さを知ることができるが、不思議に暗さがない。一首目は夫が入院中の歌だが、なんとも面白い。二首目はアラームの音に寂しさが共振する。三首目は教師としての夫を称えている。「ほそき時雨」は作者の涙でもあるだろう。四首目は夫の不在の寂しさにじむ。五首目は表題が取られた歌。アマチュア無線が好きで山登りが好きだった夫がネパールより持ち帰った礫。柁かもいろいろいな石を持っていた。言葉を持たない

けれどその人の思いが詰まっているのだ。

子の鬱に悩める吾娘が母の日に呉れたる扇

子は深き藍色

夕さればすぐ施錠する縁の戸を子は来て開

ける「ほら満月よ」

おや、孫が着てゐるセーターわたしのだ、

胴がくびれて別物のやう

近くに住んでいる娘や孫との交流を詠む歌も多い。男孫さんの不登校は長く続いたようだ。しかし今はマラソンを完走するまでになっている。二首目の「ほら満月よ」の自然を尊ぶ娘さんの明るさがすべてを救っている。三首目、ことあるごとに女孫は作者の家に立ち寄り成長した。その成長が四首目の胴のくびれにユーモラスに詠まれている。

教へ子の好意と知りて初体験七十五歳のエ

ステ効きさう

旧姓でこのわれを呼ぶ教へ子について買はさ

れぬ美白クリーム

教へ子との交流もとても親密だ。この二首で作者の明るさ、前向きさが長い交流に繋がっていることが良く分かる。

囁目詠にも「にはか雨紋白蝶はひたぶるに翅ひらめかせ車道逸れたり」のようにすぐれた歌が多い。このような歌ができるのは年齢を重ねても短歌を詠み続ける作者の意欲のためものだろう。最後に一首を掲げる。

あのころが良かつたと言つて何になる今ゆ

く道は菜の花盛り

風を生む歌

内藤 丈子

『青葉權先』は、『ティースプーン』に続く第二歌集で、二〇〇七年から二〇二二年（年齢六十六歳から八十一歳）までの四百三十一首が、小島ゆかり氏の選で収められている。

日のしづく天道虫が降りしこと気付きてゐるか青葉權先

歌集名となったこの歌は、天道虫を「日のしづく」に喩えた作者のまなざしが、太陽のひかりのように暖かい。また青葉を船の櫂に喩えたことで、波のイメージまで広がる美しい歌である。

歌集には、風、空、雲、樹木、鳥の歌が多いことに気付く。そして、全体を通して伝わってくるのは、空をわたる涼しい風である。

一羽とび次ぎてとびたつ四十雀羽風生まれ

む白樫若葉

白南風の夕べすずしさ雀子はふつと低みの

空にうかびぬ

一首目、作者は小鳥のとびたつ羽から生まれる風を見逃さない。二首目、涼しい風をまとう雀子が、まるで静止画面の

ように見える。作者の澄んだまなざしが清澄な空と重なり、読者も空と雀子にふつと慰撫される。

作者は、この歌集から吹く風のようにである。風は作者の周囲の人々や動植物に吹くだけでなく、作者の感性をのせて大空へと視点を広げる。

ひとつかみ又ひとつかみ雲を置き冬群青の

深空となりぬ

伸びてゆく老年時間 はるばると樗のこず

ゑ寒空に触る

コロナ禍の見舞ひつづれる文字のせて葉書

は冬のましろきつばさ

一首目「ひとつかみ雲を置き」というダイナミックな表現が生き、冬群青の空が読者の胸にも広がっていく。二首目、空に届くほどの「老年時間」を持っている作者。若々しいその心は、樗のように伸びやかである。三首目、「葉書は冬のましろきつばさ」の比喩が美しい。誠実に思いを綴る作者の姿が伝わる。

さらに、作者という風は、愛する人々をも包みこむ。

マンシヨンのドアをひらけばふつくらと大

気に満ちて幼子立てり

編棒をうごかすわれに孫が言ふステキとつ

てもおばあさんらしい

「おゝい陽翔のおばあちゃん」秋日さし

公園フェンス越えて声来る

一首目、お孫さんである幼子を、「大気に満ちて」と表現されたことがすばらしい。ドアを開けると、大気に包まれて生命の光を発して輝いている幼子。自然と一体化した幼子の光るいのちが見事に描かれている。「ふつくら」というオノマトベに愛しさがこもる。

二首目、「ステキ、とつてもおばあさんらしい」と言うお孫さんの会話が生き生きとし、まるで童話の一場面のような情景が立ち上る。

三首目、お孫さんの友人から呼ばれ、「公園フェンス越えて声来る」という描写に臨場感があり、ほのぼのと暖かい。

空も鳥も樹も幼子も常に作者のそばにあり、作者という風を照らして、歌心を誘ってくれる。

戦争の無き世のここにあきあかねプロペラ

千機群れて飛び交ふ

作者に戦争の記憶はないが、身内の戦禍は耳にしてこられたという。あきあかねの群れという一見美しい情景に、プロペラ機を重ねて対比する描写にぞくつと戦慄を覚える。現在の日本の平穏な風景は当たり前ではないことを、作者は忘れていない。

そして、人生を前向きに過ごされている歌に感銘を受ける。

家庭内学校介護科卒業なりわが脳細胞の一

つ一つ照る

思へらく気楽といふは手提げの中入れつば

なしの傘のあること

老いてゆく哀しみときにかがやきぬ川水が

堰にはたたくに似て

一、二首目、老いを大らかにとらえ、ユーモラスに明るく表現されている。三首目、作者のこれまでの人生には様々なことがあり、伴侶を亡くされた悲しみも経験されている。

しかし、人生を川の流れに喩え、老いてゆく哀しみも、また輝きのひとつではないか、と詠む力強さ。「哀しみときにかがやきぬ」の言葉に、読者は大きく励まされるのである。

このように、作者を支えているのは、悲喜ともに人生を肯定しようとする心である。

樺色のカバーをかけて補強せるノートは白

きページをもてり

物を大切に慈しんで使う作者は、白いページのあるノートに樺色のカバーをかける。そしてこれから、人生という白いページをどのように埋めていくか、とても楽しみにされているお姿が目浮かぶのである。

元気に一人暮らしができることに感謝し、散歩に作歌にと励まれている作者。これからますますお元気で短歌を詠み続けられることを願ってやまない。

末野の撫子のよように生きて

渡辺 南央子

本歌集は、浅田みどりさんの第一歌集である。二〇〇六年から二〇二二年迄の四八八首を纏められた。

万葉の歌を思わせる丁寧で素朴な詠み口ながら、時に哲学的な考察を思わせる歌も垣間見られ大変魅力的な歌集である。どの歌を採っても生活の穢れを持たず、優しく謙虚な作者を彷彿とさせる。まるで末野の撫子の様である。たぶんそれは、幼い時分に母君と暮らした旧金砂郷村（現常陸太田市）の澄んだ空気や、久慈川の溪流、村人達との穏やかな交流などの背景のせいかもしれない。この混濁した世に在って、どこか古風で超然として、その静かな生き方はぶれることがない。

水漬きたる稲は芥をその花穂にかずきたる
まま身を起こしたり

胴吹きの花のかたえに車いす寄せて触れさ

す桜いちりん

ほろほろと記憶の中に崩れゆく母さま来ま

せ ほれ黄身時雨

ほうれん草蒔き時すぎてまかれれば幼き身

して花穂かすいつけたり

何年も繰り返し花実をつける稲や野菜たち、その律儀なさまを柔らかい擬人法で表現している。二首目は晩年の母君の介護の日々の一コマである。母と娘であるからこそその情愛。胴吹きなまの桜に触れさず、の具体が胸を打つ。

羽化すれば飛ばねばならぬと今はただ戸袋の端はに涅槃の蛹

何ごともなかりしごととき貌をして衝突プロセッタルム盆地

という傷を持つ月

衝突盆地を月の傷、と捉える歌が他にあつたらうか。美しく見えるものの蔭の痛みを感じとる感性。この本質が彼女の歌を深いものになっている。哲学的、科学的な表現が、独特の説得力を持つことにも気付かされる。

たわむれにおさなの鳴らす鈴りんの音ねに仏間あ

まねく澄み清めらる

掛かりたる暦を何度も兎は見つむ「暦の上

では春です」と聞き

雪うさぎ融けるを知らぬ子に母は雪のお山

に帰りぬと告ぐ

うまきもの頬ばるせつな浮かびくる共に食
べたき人の顔、顔

大人になってそれぞれが自立していく、そのへあたりま
えをふっとかき消すような感慨、寂しさ。共に食べたい家
族との団欒はあと何度訪れることだろう。美味しいものだか
らこそ分け合いたい子供たちや孫たち。

おさな鳴らす鈴の音にハッとさせられ、ここに綿々と連
なる縁が温かい。

道中に果てたる馬の塚に降る村びと植えし
山ざくら花
花影に清められたる墓石六つ桜吹雪を静か
に待てり

叙景を詠んでいながら、それだけでない心の在り処が滲む
歌には度々立ち止まった。

夜の雲の切れしあいまに七つ星柄杓を垂れ
て秋をこぼせり

ボンネットにトノサマバッタ胸張るをエン
ブレムとし農道を駆る

金糸もて月に菅縫いほどこせば「おぼろ月
夜」の歌聞こえくる

刺繍するスケッチをする本を読む寡黙にお
れどこころ花めく

溪流や、名も知らぬ草木や、小さな生き物や家族をこよな
く愛し、母の故郷、旧金砂郷村への想いが呼吸するように息
づいている。

いつか東京歌会に参加された時、藍染だったか紬の和服に、
手刺繍と言う、野の草花の施された帯を締めていらしたこと
があった。

こんなところにも著者の、華美とは無縁の、慎ましく丁寧
な生き方が偲ばれる。

娘らの歌うハンガリー民謡はなにがな淋し
江差追分に似て

夕暮れのバラトン湖畔に秋田犬 思わず日
本語で話しかけたり

長月の旅終わりでもハンガリー時間を刻む
わが腕時計

つかの間のハンガリー旅行的一幕。異文化や異民族との接
触は、慣れるまで奇妙な浮遊感を感じるものだ。どこかで祖
国のしがらみを引きずる。少し微笑ましい一場面。秋田犬は
日本語を理解したろうか。

捨てられしピアノは栗の樹に凭れただ一音
を栗の実の弾く

最後になるが、芥川竜之介の短編「ピアノ」に寄せて詠ま
れたこの一首に、ことに心惹かれた。廃墟の跡に棄てられた
ピアノに落ち栗が奏でる音。原作の幻想的な情景と相まって、
モノが繋いできた哀しみの景。まさに著者の诗情と相寄るも
のを感じる。

歌は三十一音だけれども、もしかしたら落ち栗が鳴らした
ピアノの音のように、「歌」もまた、個々の生命の眩きなの
かもしれない。